

震災で苦勞した水の確保

震災の記録
十符風の音



震災翌日雪を溶かし水の確保



震災当夜施設に泊りこむ職員

3月11日午後2時46分地震発生 同4時ごろ災害対策本部を設置。施設内ホールにテーブル、椅子、ホワイトボード、ブルーシート 災害用備品（ペットボトル水、乾燥米）バーベキューセットなど、野外生活で使えるものを倉庫から出して来る。病院と違い、介護施設の生活で注意をしたのがこれまでの生活習慣を取り戻すこと。怪我をした人たちがひっきりなしに出入りするわけではなく（病院からの受け入れは多少あったが）まず十符・風の音で生活をしている特養ショートあわせて70名の入居者さん方が普段の生活をし、多少は不便でも笑って過ごしていただけるように約70名の職員が時間の許す限り（多くは泊り込みで）奮闘努力をした。その際にやはり問題になるのは何をさしおいても水の確保。体温が下がるのを防止するとともに、ペットボトル水の中に期限切れのものがふくまれていたため用心のため、飲み水はたとえペットボトルの水でも沸かした水を飲むように徹底（上水）。レトルトなど温めるための水は雪を溶かした水を使うようにする（中水）。トイレの水は雨水を利用していたが、ポンプに電気がきていないので使用できず。小は水を流さず、大は外の畑に用を足すように指示。後に沼から水を汲んできて塩素を投入したものをトイレ用に使うことにした（並水）。

水がないということは施設がある利府葉山地区の住民も同じことで、数日間は貯水車が施設前に来て水の配給所が作られた。数日後には葉山地区に水道水を供給している貯水タンクを復旧。その水を施設でも職員が並んで飲料水に使う。この時点で開けていないペットボトルは上水に格上げ。冬のさなかに暖房も十分ではない状況で過ごすためには飲み水の確保と同時に風呂代わりに体を拭くためのお湯の確保も重要だった。感染症などの心配があった。そんな感じで水の確保に追われながら震災から1ヶ月程、朝昼晩湯を沸かし続けていたように記憶している。今となっては思い出したくない嫌な思い出である。燃料（薪、ガソリン、灯油など）についてもいろいろあるが、それはまた別の機会に。（写真と文 斉藤 誠）

東日本大震災で延期されていた岩手、宮城、福島3県での地上デジタル放送への完全移行が3月31日に迫っている。

東日本大震災で被災した人は、チューナーの無償配布を申し込むことができる。

無償配布は、家屋が半壊以上の被害を受けるなどした場合で、地デジ対応のテレビが1台もない人が対象で、印鑑と被災証明書が必要。地デジ対応に関する相談は、市町村役場などに設置された臨時相談コーナー。またはくデジサポ宮城> 電話 022 (745) 1500

東日本大震災被災者支援

地デジチューナーの無償配布

学習用 DVD

放射線内部被曝から子どもを守るために



福島原発の事故から、7ヶ月（DVD作成時）。

政府、東電の不誠実とも言える対応により、放射性物質に汚染された食品が、一般市場に出回ってしまいました。ただでさえ高い国の基準値を、はるかに上回る放射線値が一般流通品から検出されたり、放射性物質に汚染された可能性が高い食材が給食に使われ、自治体の対応が保護者の批判を浴びたりしています。

被曝には、体の表面に放射線を浴びる「外部被曝」の他に、呼吸や汚染食品の摂取により放射性物質を取り込み、それが体内で発生させる放射線で被曝する「内部被曝」があります。いま、この「内部被曝」への関心が高まり始めています。

この関心に応えるために、DVDが製作されました。

内部被曝とは何なのか？ 私たちは何を対策すべきなのか？

コンパクトに、分かりやすく紹介されています。このDVDを通して、より多くのみなさんに内部被曝のことを知っていただき、子どもだけでなくご家族や自分自身を、放射能から守ってほしい。

上映時間：23分

DVD視聴希望の方は、宮城民医連または事業協までお問い合わせ下さい

■主な出演者

埼玉協同病院名誉院長 肥田舜太郎氏
チェルノブイリ医療支援医師・松本市長 菅谷 昭氏
東京大学アイソトープ総合センター長 児玉龍彦氏
農民連食品分析センター所長 八田純人氏 ほか